

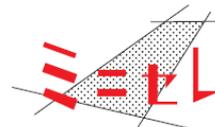


公益財団法人愛知県文化振興事業団

2022年5月18日(水)
愛知県芸術劇場
(公益財団法人愛知県文化振興事業団)
広報・マーケティンググループ
☎ 052-955-5506

<Press Release>

報道各位



2022年度の開幕を飾るミニセレ第1弾
近代演劇の父イプセンの名作をコンテンポラリーダンス・映像・音楽で

Co.Ruri Mito 2022

『ヘッダ・ガーブレル』



©matron

お問合せ

愛知県芸術劇場(公益財団法人愛知県文化振興事業団)

広報・マーケティンググループ(武石) 企画制作グループ(唐津)

〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2 Tel 052-955-5506 Fax 052-971-5541

E-mail: pr@aaf.or.jp WEB: <https://www-stage.aac.pref.aichi.jp/event/detail/000802.html>



Co.Ruri Mito 2022 『ヘッダ・ガーブレル』

東京・愛知公演

作:ヘンリック・イプセン 翻訳:原千代海 演出・振付・主演:三東瑠璃



令和2年度 文化庁芸術祭 舞踊部門 新人賞 受賞

ダンサー・振付家

三東瑠璃

《公演概要》

チェーホフなど海外の戯曲作品の創作により国内外で高い評価を得ている壁なき演劇センターが、昨年(2021年)3月に振付家・ダンサー、三東瑠璃を演出・振付そしてメインダンサーとして招き、アンサンブルにCo.Ruri Mitoで活動するダンサー、映像キャストに映画や舞台など幅広いシーンで活躍する森山未来らを配し挑んだ話題作、「ヘッダ・ガーブレル」。“近代演劇の父”と称されるノルウェーの劇作家ヘンリック・イプセンの代表作である今作品を、コンテンポラリーダンスと映像と音楽で紡ぎ表現し、高い評価をいただきました。今回は演出をよりダンスに近づけたものにし、より多くの観客に届くよう、東京(東京芸術劇場 シアターイースト)と愛知(愛知県芸術劇場 小ホール)での公演を決定いたしました。劇場に人が集みにくい日々が続きますが、ダンスの魅力を多くの方に知っていただく試みの一つになればと考えます。

《ヘッダ・ガーブレルについて》

ノルウェーの劇作家イプセンによって1890年に書かれた戯曲。気丈で美しく、しかし内には捕らえられた獣のような怯えや怒りを抱えているヘッダ。閉塞感からの解放と人生の勝利を手に入れようとするが社会の力に声も奪われ、それでも誇りや尊厳は譲り渡すまいとする彼女の人生を通して『いったい自分は何処へ向かう何者なのか?』という命題が浮かび上がってくる。リアリズムの形式で書かれているが、メタファーとシンボルが巧みに活用された作品である。(杉山剛志)

《三東瑠璃 コメント》

ヘッダ・ガーブレル

2021年初演時のクリエイション開始前に本読みを始めた頃、すぐに私は、自分自身がヘッダなのではないか?と感じました。私は、物語をそのまま追って披露することで「何か」を伝えようとは思いませんでした。ヘッダの人生を通して「何か」を伝えたいと

思いました。その後はヘッダに寄り添った形で本を読むことになっていきました。ドラマトゥルクの杉山さんと戯曲の本質を探るべく、読解に時間を費やし語り合いました。そして私の個人的な意識と結びつけてヘッダという人物が私の中で育てられていきました。時に内側に抱えているもののほとんどがネガティブに感じられました。苦しみも痛みも嫉妬も愛情も、それらすべてをダンス(身体)で表現しました。本の中でヘッダは死んでしまいましたが、今、私は、生きることを選んでいます。私はヘッダでもあるし、三東瑠璃でもあるのです。そんな気づきを得てからは少し気持ちが楽になりました。受け入れ、受け入れられる関係を築きたいという心の奥底の叫び、想いも作品に現れている気がします。でもヘッダは死んでしまいました。それはなぜでしょうか？ ご覧になった皆様に、様々な解釈ができるような演出をしました。自分自身を見つめ直すきっかけになれば嬉しいです。このダンス作品では、ヘッダ以外の登場人物はいません。ヘッダとコロス 4名、映像、音楽、舞台美術、照明、衣裳で構成されます。再演ではありますが、初演と同じ時間をかけて本気で毎日稽古を積み重ねています。ぜひ劇場まで足を運んでいただけましたら幸いです。

東京公演

東京芸術劇場 シアターイースト

(豊島区西池袋 1-8-1)

2022年6月16日(木)19:30 プレビュー公演

17日(金)15:00 19:30

18日(土)13:00 (+アフタートーク)

20日(日)13:00

愛知公演

愛知県芸術劇場 小ホール

(名古屋市東区東桜一丁目 13 番 2 号)

2022年6月29日(水)20時

30日(木)14時

《出演》

三東瑠璃 / 青柳万智子、安心院かな、金愛珠、斉藤稚紗冬 (Co.Ruri Mito)

《映像出演》

森山未来、杉山剛志、中村あさき、宮河愛一郎

《スタッフ》

演出・振付:三東瑠璃、照明:櫛田晃代、音響:牛川紀政、舞台監督:川口真人(レイヨンヴェール)、美術:加藤ちか、衣裳:稲村朋子、音楽:熊地勇太、映像:浜嶋将裕、ドラマトゥルク:杉山剛志、舞台協力:筒井昭善、

協力:一般社団法人 壁なき演劇センター、 広報:西原栄、 制作:西原栄、橋本玲奈、後藤かおり

助成:公益財団法人 セゾン文化財団

東京公演 提携:公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場 主催・制作:Co. Ruri Mito

愛知公演 主催:愛知県芸術劇場、Co.Ruri Mito 制作:Co.Ruri Mito

《チケット発売》

東京・愛知 2022年4月23日(土)

《プロフィール》

ヘンリック・イブセン(Henrik Johan Ibsen) (1828-1906)

「近代演劇の父」と称されるノルウェーの劇作家、詩人。シェイクスピア以降、世界でもっとも盛んに上演された劇作家としても知られる。幼くして家が破産し、風刺的な詩や戯曲などを書き始める。創刊した週刊誌は廃刊、支配人となった劇場も経営不振で閉鎖の憂き目にあうが、戯曲『ブラン』(1866)がようやく世に認められ、『人形の家』(1879)で不動の名声を得る。その後は『幽霊』(1881)『民衆の敵』(1882)などの戯曲を世に送り、近代演劇だけでなく、女性解放運動にも大きな影響を与えた。

三東瑠璃(演出・振付) Co.Ruri Mito 主宰

5歳からモダンダンスを始める。2004年日本女子体育大学舞踊学専攻卒業。2004-2010年ダンスカンパニー<Leni-Basso>所属、その後フリーランスとして活動。スウェーデン王立バレエ団にてゲストダンサーとしてWim Vandekeybus『PUUR』、Sasha Waltz『Körper』に出演。またDamien Jaletと名和晃平による『VESSEL』に出演等国内外で、ダンサーとして活躍。2017年に土方巽記念賞を受賞。同年、<Co.Ruri Mito>としてグループ活動を開始。2020年に文化庁芸術祭新人賞を受賞。2021年6月公開石川慶監督映画『Arc』で振付を担当。2020年度より公益財団法人セゾン文化財団セゾン・フェローII。

Co.Ruri Mito (コー・ルリミトウ)

国際的に活躍する三東瑠璃主宰のダンスカンパニー。個々の身体の特徴を深く追求しながら時間をかけて質の高い作品の創作を目指している。これまでに『みづうみ』(2017年)、『住処』(2018年)、後藤正文(ASIAN KUNG-FU GENERATION)とのコラボレーション作品『MeMe』(2019年)、『Where we were born』(2020年)、『TOUCH-ふれる-#1』(2022)を発表。

